説明文をめざして

中島　賢二

今までの公開研究会

われわれは、子どもたち自身が自発的に書くことを楽しむ素地を養っていきたいと考えている。そのための入り口としては、思いや感情を表現しやすい生活作文や行事作文が効果的であると考えている。

２００６年・２００８年の公開研究会では、そんな生活作文・行事作文を題材として「書く」領域を研究してきた。子どもたちの新鮮な思いや感情を読むことはわれわれにとっても楽しく、それだけに子どもたちに書く楽しさを味わわせてやりたいと願っていたのだ。

なぜ、説明的な文なのか？

子どもの作文を分析的にみると、大きく二つに分かれる。思いや感情を書いている部分と、事実関係を述べ立てている部分である。

日常に密着した作文の中にも、事実の描写や列挙の際には必ず説明的な要素が要求される。そして、その部分の錬成なしには、表現の質的向上、書きたいという欲求の継続は難しい。この考えから、作文指導研究における力点を、これまでの「思いや感情を書いている点」から、本年度は「説明箇所、あるいはそれを特化した説明文そのもの」の研究にシフトした。

これまで説明文は、主に「読む」、つまり読解教材として扱ってきていた。そこで研究は、「作文指導で扱うべき説明文とは何か？」という根本的な考えを討議することから始めた。

学外の方々からも意見をいただき、われわれは次のようにまとめた。

作文指導で扱う説明文とは（我々はこのように考えている）

「心を揺さぶる事実との出会いがあり、

その事実との関わりを相手や目的に応じて正確かつ効果的に記した文章」

説明文というと、そこには薬の用法や電化製品の取扱説明書なども含まれるであろうし、報告文や記録文、案内文なども説明文といえることは間違いないであろう。けれど、こういった文から心をゆさぶられることは非常に稀なはずである。

私たちは授業で子どもたちに書かせようとしている説明文とは、実生活から生じる**心を揺さぶる事実との出会いがあり、その事実を認識しその事実との関わりを相手や目的に応じて正確かつ効果的に記した文章**である。

電化製品の取扱書のような、ただ単に情報を伝達するのではなく、作者の感動や心のふるえを伴い、その感情とともに事実や考え、意見を正確に伝えるべき必要性のある文章を、子どもたちに書かせたいと考えている。

説明の難しさとおもしろさ

言葉や文章が、伝達手段であることは明白である。我々は言葉や文章を介して、自分の気持ちや考えをより正確に相手に伝えようとする。ただし、気持ちや感情を伝えることと、考えや意見を理解してもらうことには、大きな違いがある。

気持ちや感情の場合は生理的なものであり、曖昧でも伝えることが可能である。それに対して考えや意見は曖昧では正確に伝わらない。それどころか言葉の使い方一つで、言いたいことと相反する受け取られかたをしかねない。

また、気持ちや感情は、緻密に考えなくても狭い集団の中なら伝えるのはたやすい。それに対して、考えや意見は、たとえ狭い集団であっても丁寧な言葉の選択や順序等のあらゆる条件を使って構成しないと正確に伝わりにくい。つまり、共通項が少ない相手、または立場や考え方が全く違う人にも考えを理解してもらえるよう、子どもたちは細心の注意を払って文を書く必要がでてくるわけである。ここに、説明文を書く難しさがあり、同時におもしろさがある。

ただ、説明文と生活作文や行事作文を完全に区別することはなかなか難しいと認識している。現時点では、個々の作文の中での説明能力をより充実したものにすることを重点項目として目指している。

今までの説明文の取り組み

低学年では教科書教材読解のあと、記述や表現を意識させその教材の構造の特徴を見つけ、その構造の特徴を利用して新たな事物の説明文を書かせる。その手だてとしてワークシートを作り活用した。

高学年で実際に経験したことを、なるべく共有の経験を持たない下の学年を相手に想定して、上手く説明でき理解してもらえる文章を書くように指導した。下の文は、その一例である。

（A子さん）

十人ピラミッドは、一番下に四人が四つんばいになって、その上に三人が同じ体勢で乗って、その上に三人が同じ体勢で乗って、その上に一人がひざで立って両手を広げ、全員顔を上げます。これで完成。

簡単に見えるかもしれないけど、結構難しいです。足がすべって落ちたりします。私は一番下だったけど、一番下はすごく体重が背中とうでにかかってめっちゃ痛いです。いくら上の人が軽くても、六人も乗られると百キログラム以上は体重がかかると思います。それを一番下の四人で支えるわけです。とにかく、めっちゃ痛いし、しんどい。

コツは、とにかくガマンする。めっちゃ痛くて死にそうでもガマンすること。後は叫んだりせず無言でやったほうが良いと思う。

後は上にまかせるしかないです。

体育会の組み体操を題材にした文章である。しかも、次に組み体操をやるであろう学年の子を読者として意識した文章である。このように、作者がどういった経験を積み、その上で誰に何を伝えたいかを自問することが説明文の出発点になると考えている。

ただし、この作文はまだまだ未完成である。

今後、この児童には、「どの部分を相手により伝えたいか」を認識させ、「どの部分を正確に説明しなければならないか」「どういった表現をすれば効果的なのか」を指導していく必要があると考えている。そのためには、まず自分が書いたものを客観的な立場から読解し、推敲するという手だてを指導していく必要がある。

読者は、組み体操についての予備知識がなく、実際に組み体操の経験のない、または経

験の少ない読者である。作者は、その読者の立場になることが大切である。

次に、そういった読者が、作者の描いている組み体操のイメージをできるだけ忠実に再構築できるように、文章で表現する力が求められる。

例えば、「完璧なピラミッドを造るためには、２段目を構成するメンバーの体型や体重、バランス感覚が同じであることが理想である。さらに言えば、その上の段を構成するメンバーは２段目より体重が軽く均一、もちろん同じバランス感覚を持っているとなおよい」というような、現実ではありえない逆の事例を挙げて、実際にピラミッドを組み立てる際に直面する問題点を明らかにしていく「反証」の手法や、「もし…したら」という「仮定」の技法等の使用などを例示しながら、説明的な表現力を向上させていこうと考えている。

「反証」の手法や、「もし…したら」という「仮定」の技法等の使用などを例示しながら、説明的な表現力を向上させていこうと考えている。

作文力育成のための指導過程

	指　導　内　容（低学年）
設定	○発想・構想 ・説明文を読解すること。（構造の理解を含む） ・題材に必要な事柄を集めること。
記述	○表現方法（模倣） ・語と語、文と文の続き方を意識して書くこと。 ・順序立てて書くこと。 ・事実を正確に書くこと。 ・説明文の構造を意識して書くこと。 ○原稿用紙の使い方 ・正しい書き方を理解させ、禁則処理にそって書くこと。 ○交流 ・他者の説明の仕方などを参考にすること。 ○推敲 ・個々と話をしながら、添削すること。 ・文章を読み返す習慣をつけること。（誤字脱字の訂正）
評価	○自己評価 ・自分の説明文を見直すことができること。 ○相互評価（交流） ・教師が個々の説明文の良いところを指摘すること。 ・他者の作文の効果的な表現を見つけ合わせること。

	指　導　内　容（中学年）
設定	○発想・構想 ・興味、関心のある事実などを見つけること。 ・興味ある事や関心を持った事の中から、書きたい事を選び、調べること。 ・文章全体から見た段落の役割を考えること。（例：はじめーなかーおわり） ○交流 ・発表する相手や目的に合うように考えること。
記述	○表現方法（自主選択） ・文章の組み立てを考えて書くこと。（内容の順序性） ・自分の伝えたいことの中心を明確にすること。 ・理由や具体例を挙げて書くこと。 ・事実を正確に書くこと。（見たもの・したことを詳しく） ・書き始めや文末表現を考えて書くこと。 ・一文一義で書くこと。 ・常体と敬体をそろえて書くこと。 ・指示語、接続語を正しく使って書くこと。 ○原稿用紙の使い方 ・原稿用紙の正しい決まりに沿って書くこと。 ○交流 ・他者の説明の仕方などを参考にすること。 ○推敲 ・文章の間違いを正したり、よりよい表現に書き直すこと。 ・伝えたい事実が書き表されているかを確認すること。
評価	○自己評価 ・自分の説明文を見直すことができること。 ○相互評価（交流） ・教師が個々の説明文の良いところを指摘すること。 ・他者の説明文から読みとれたことを話し合うこと。

	指　導　内　容（高学年）
設定	○発想・構想 ・常に読み手がいることを意識した客観性の高い表現を目的とすること。 ・自分が発見したことや感動したこと事実の中から、どうしても第３者に伝えたいと思う事物や事象を選択すること。 ・書く事柄を収集すること。 ・情報の整理をすること。 ・自分の考えを明確に表現するため、論理的に文章全体の構成（段落など）を考えること。 ○交流 ・他者の発想や構想から、自分の自分の考えを再認識させること。
記述	○表現方法（自主選択） ・効果的な文章の組み立てを考えること。（順番を考えて） ・具体的に書くこと。 ・事実を正確に書くこと。（見たもの・したことを詳しく） ・事実と意見を区別して書くこと。 ・対立する意見を取り上げて反論を書くこと。 ・違った視点からいろいろな事例を書くこと。 ・書き出しや文末表現を考えて書くこと。 ・一文一義で書かせること。 ・常体と敬体をそろえて書くこと。 ・倒置法や省略法を使って書くこと。 ・指示語、接続語を正しく使って書くこと。 ○原稿用紙の使い方 ・原稿用紙の正しい決まりに沿って書くこと。 ○交流 ・他者の説明の仕方などを参考にすること。 ○推敲 ・推敲させて、清書させること。 ・自分の言いたいこと、伝えたいことは明確であるか確認すること。 ・意見と事実は区別してかかれているか確認すること。
評価	○自己評価 ・自分の説明文のよいところを見つけさせ、その理由を書かせること。 ・次回書きたい説明文の目標を書かせること。 ○相互評価（交流） ・教師が個々の説明文の良いところを指摘すること。 ・他者の説明文を客観的に読み、その事実や内容に心揺さぶられるものがあったかどうかを検討すること。 ・自分と他者との相異点と共通点に気づくこと。